

論文

ニーチェと「聖書」の間

—愛に関する若干の記述の考察—

北岡 崇

一 はじめに

「聖書」、特に「新約聖書」に対するニーチェの論評は手厳しい。「——で、そこから何が帰結するか？ 新約聖書を読む時には手袋をはめた方が身のためだということである。こんなにひどく不潔なものの近くにいれば、ほとんどそうするより他ない」⁽¹⁾、「われわれを〔キリスト教徒から〕分離させる所以のものは、……〔キリスト教徒によつて〕神として崇められたものを、われわれは〔神的〕と感じることなく、むしろ哀れむべきものとして、荒唐無稽なものとして、有害なものとして感じるということ、たんに錯誤としてばかりでなく、生に對する犯罪として感じるということ、これである」⁽²⁾、彼の著作『アンチクリスト』⁽³⁾は、「新約聖書」とキリスト教に対する批判的な言葉には事欠かない。さらに、「わたしはキリスト教を今までに存在した、人を誘惑するもつとも不吉な嘘であるとみなしている。すなわち、神聖ならざる大嘘であるとみなしている」と記す⁽⁴⁾遺稿もある。こうした論調の言葉が数多く記されていることから、

ニーチェは「聖書」を敵視するのみで、ニーチェと「聖書」の間に思想上、和解の可能性はないと判断されるかもしれない。

たしかにこうした判断を覆すのは困難なことである。しかし、両者の思想を架橋する可能性は、皆無であろうか。愛をめぐる二つの考察からなる本稿は、ニーチェの思想と「聖書」の思想が近接する点を見いだし、その架橋の可能性を探る試論である。

二 第一の考察…自己への愛

自己への愛というテーマは、ニーチェの思索の中心部に位置するテーマである。ニーチェは、このテーマを、「聖書」所収の『レビ記』や『マタイによる福音書』に記された隣人愛の掟との関連のもとに考察することがある。『レビ記』第十九章第十八節には「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」と記されており、『マタイによる福音書』第二十二章第三十九節には「隣人を自分のように愛しなさい」と記されているが、いずれの章句においても隣人への愛は自己自身への愛を規準にした掟として命じられている。⁽⁵⁾自己自身への愛を規準にしているというこの点に着目した上で、ニーチェは次のように言う。

ともかくあなたがたの隣人を、あなたがた自身と同じように愛するがいい、——だが、その前にまず、自分自身を愛する者となつてくれ⁽⁶⁾——

(「小さくする美德」三)

この言葉は、自己自身への愛を説くニーチェが、「聖書」の思想、隣人愛の掟をみずからの思想空間にどのように位置づけ捉えているかを明らかにする上で見過ごすことのできない言葉である。同様に見過ごすことができないのは、『ツァラトゥストラはこう言った』に所収の「隣人への愛」の章である。この章には、特に注目すべき章句として、次の章句が記されている。

あなたがたは、自分自身にがまんができず、また自分を十分に愛していない。そこであなたがたは隣人を愛へと誘惑し、誘惑に乗った隣人のその錯誤によって自分に金めつきをかけようとするのだ。⁽⁷⁾

（「隣人への愛」）

どうやらニーチェの目には、隣人愛を実践すると自称する者はたんにそれを自称しているだけでその実、自己自身を愛することのできない者と映っていたようである。また、ニーチェは、自己自身を愛することのできない者が実践すると自称する隣人愛なるものは実は「聖書」が言う意味での隣人愛ではないことを見抜いてもいたようである。そうした掟への服従を実践しようとする者がはたしてみずからほんとうに自己自身を愛するに価する者として捉えているか、また現に自己自身を愛しているか、虚心に自問すれば、誰もが自己自身への愛を確信できないことを自覚するにちがいない、すなわち、イエスがもっとも重要な掟の一つとして語る隣人愛の掟はキリスト者であることを自称する人々にあつてさえも遵守されてはい

ない、とニーチェは考えている。自己自身への愛が規準となつている以上、「聖書」の言う隣人愛の掟とは、自己自身を愛せない者には遵守することのできない掟、したがって自己自身を愛せない人々の間では何の効力もちえない掟である。人が自己自身への愛を学び、その愛を生きることができなければ、その者にとって、隣人愛の掟は何らかの効力をもちうる掟であることはできないのである。

ニーチェにおいてのみならず、隣人愛を思想の中心に据える「聖書」においても、自己自身への愛がきわめて肝要な位置を占めているのであるが、しかし、言葉の上では同じその自己自身への愛が実は、「聖書」の言う隣人愛の掟の場合と、自分自身を愛する者となれとニーチェが説く場合とは、その意味するところは同じとは言えない。「聖書」の言う隣人愛の掟の場合、自己自身への愛とは、究極的には、人間のみならず、世界全体、宇宙全体を統一する神の神自身への愛と一つのものであり、神の神自身への愛と同じものである。

「聖書」の場合、自己自身への愛とは究極的には神の神自身への愛と同じ一つの愛であるというこの事態をもう少し詳しく説明しておこう。パウロが『ローマの信徒への手紙』第一章第二十節で「世界が造られた時から、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます」と述べているように、「聖書」によれば、人間、動物、植物、海と陸、星々など、ありとあらゆるものを創造した神は、自分自身が創造者であることをおのおのの被造物において証している。⁽⁸⁾特に人間を創造するにあたって「神は御自分にかたどつて人を創造された。神に

かたどって創造された」(『創世記』第一章第二十七節)と記されているように、人間という存在は、「聖書」において、いわば神のかたちを刻印された存在、他の被造物には認められない別格の神性を帯びた存在として、つまり神の存在を他の被造物の何者にもましてよく証する存在として了解されている。このように了解された思想空間にあつて、人間が自己自身を愛するその愛とは、その人間が自己自身における神のかたち、自己自身における別格の神性に気づき、それを愛するということである。そして、人間が自己自身において自己自身の別格の神性に気づき、みずからそうした神性を刻印された存在として、そうした神性を刻印された存在としての自己自身を愛するというのは、すなわち神性をもつ存在が神性をもつ存在として神性をもつ存在を愛するということであるから、神が神自身を愛するその愛の活動のなかに包含される活動であると言える。あるいはまた、自己自身の神性に気づいた人間が神性をもつ者である自己自身を愛するその愛とは、神性をもつ者として創造されたままにある人間の神への愛の活動と同じだとも言いうるであろう。そして人間が神を愛するその愛と同じであるとともに神が神自身を愛する愛とも同じであるような、人間のこうした自己自身への愛を規準にして隣人を自分のように愛することが隣人愛であるなら、その隣人愛もまた、神性をもつ者として創造されている自己自身が、同様に神性をもつ者として創造されている限りでの隣人を愛することに他ならず、これもまた、神の神自身への愛の活動のなかに包含される愛であると言えるだろう。『マタイによる福音書』第二十

二章第三十七節から第三十九節を注意深く読めば、こうした解釈の裏付けを得ることができる。律法のなかでどの掟がもっとも重要かと問う者に、イエスは次のように応えている。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」これがもっとも重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。「隣人を自分のように愛しなさい。」律法全体と預言者は、この二つの掟にもとづいている。
(『マタイによる福音書』)

二つの掟は「同じように重要である」と記されている。つまり、二つの掟は二つとも「もつとも重要」ということである。神への愛の掟と隣人愛の掟の両方が「同じように重要」、「もつとも重要」であるというのは、これらはともに、究極的には、人間の自己自身への愛と同様、神の神自身への愛の活動のなかに包含される愛であるからである。神の神自身への愛が、人間の自己自身への愛や、人間の神への愛や、人間の隣人への愛という多様な姿をとるにせよ、これら三様の姿は、すべてその本性において神の神自身への愛に他ならないからである。「聖書」は、神への愛の掟と隣人愛の掟において、神に真に献身する人間たちを統一し、神への真の愛において人間同士を結びつけようとしているのである。

それゆえ隣人愛の掟においてその愛の規準として語られる自己自身への愛とは誰もが日々の生活のなかですでに実践しているままの

愛、多くの場合は自己存在への反省が不十分なままに利己的と呼ばれる愛の意味で語られているのでは決してない。そのような意味での愛であるなら、その愛は、その人を他の人と結びつける道を拓くことも、その人を神と結びつける道を拓くこともなく、かえってその人を他の人から、また神から離反させ、かといってその人をその人自身へと導くこともなく、その意味ではその人をその人自身からも孤立させ、その人を迷わせるだけの結果に終わりがねない。

しかし、神の神自身への愛に包括される自己自身への愛と、ニーチェが自己自身を愛せよと説く場合の自己への愛は、同じではない。ニーチェが、隣人愛の掟に従うと自称する多くの人々のその愛を、すでに彼らの自己自身への愛において破綻しているとみなしていることは前にも述べたが、ニーチェはすでにそれに先立ち、「神を無みする者」⁽¹⁰⁾として、基本的には、神の神自身への愛なるものをありえない妄想とみなすとともに、隣人愛の掟を「嘘と偽善」のために役立つことはあつたにせよそれ自体は妄想の産物にすぎないと考えている。それでは、ニーチェが説く自己への愛とは一体どのような愛であろうか。彼はそれを、きわめて困難な「究極的な技芸」を要する愛であると言い、次のように記している。

人は自分自身を愛することを学ばなければならない、すこやかで健康な愛をもつて。——こうわたしは教える。自分自身であることに堪え、あちこちさまよい歩くことがないために。

このようにあちこちさまよい歩くことが、「隣人への愛」と自

称している。この言葉で、これまでにはなはだしい嘘がつかれ、偽善が行なわれてきた。……

そしてまことに、自分自身を愛することを学べ、という掟、これは今日明日に実行できるようなものではない。むしろこれこそ、あらゆる技芸のうちで、もっとも精妙な、巧緻と辛抱をもつとも必要とする、究極的な技芸なのだ。

なぜなら、すべて自分に固有の所有物は、その所有者である自分自身にたいして、たくみに隠されているからである。地下に埋もれたあらゆる宝の鉱脈のなかで、自分の宝の鉱脈がいちばん遅く発掘される。⁽¹¹⁾

(「重力の魔」二)

そもそもニーチェによれば、自己への愛を成就できるのは超人であり、それゆえ自己への愛を生きようとする者は超人への道を歩もうとする者、「自分に固有の所有物」、「自分の宝の鉱脈」を手に入れるようにする者である。もちろん、これは、ニーチェの言う超人が、「聖書」の言う隣人愛の掟への従順の必要条件として自己自身を愛するという意味ではない。つまり、ニーチェの意識としては、超人にして初めて隣人愛を実践しうると見込んだ上で、自己自身を愛せよと語っているのではない。このことは、超人への道を歩むように説くツァラトゥストラの次の言葉においても明確に現れ出ている。

弟子たちよ、これからわたしはひとりで行く！ あなたがたも今は立ち去るがいい、そしておのおのがひとりで行きなさい

い！そのことをわたしは望む。

今、わたしはあなたがたに命令する。わたしを捨て、あなたがた自身を見いだし、と。⁽¹²⁾

（「贈り与える徳」三）

「わたしはひとりで行く！あなたがたも……ひとりで行きなさい！」とあるように、自己自身への愛とは孤独者の愛であり、自己自身を愛そうとする者は孤独な道、自己自身への道を歩まなければならない。この道を歩む孤独者の歩みが、自己自身への愛に導かれ、自己自身へと至り、最終的には自己自身の救済に至るのなら、孤独者はいわば、各人がそれぞれ自己自身の救済者となる地点をめざし歩み行くのであるから、「聖書」に言われるような救済の道、イエス・キリストが拓いた道を皆が揃って歩み行くというのではない。「聖書」には、「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その門も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない」（『マタイによる福音書』第七章第十三節から第十四節）という章句があるが、ニーチェの考える道は、狭い道でも広い道でもない。孤独者が自己自身のために拓くその孤独者だけのための道が必要なのである。一人ひとりが一人ひとりその人に固有の道を行くのである。その道は、その道を歩む当のその単独者以外の誰かその人を、その誰かその人自身へと導いていくことは決してない。ツァラトゥストラが自己自身に語りかける次の言葉も、この意味において理解できる。

おまえは偉大へと向かうおまえの道を行く。ここでは誰にも、おまえの後をこつそり追いかけてはならない！おまえの足そのものが、おまえがいま来た道を踏み消すのだ。⁽¹³⁾

（「旅びと」）

さらにまた、ニーチェが、「人間を発見することはむづかしい。とりわけ、自分自身を発見することは、いちばんむづかしい」と記した後に、……

だが、次のように言う者は、自分自身を発見した者なのだ。
——「これはわたしの善と悪だ」⁽¹⁵⁾と。
（「重力の魔」二）

……と、記すのも、超人への道が孤独者の道であり、自己自身への愛は、普遍性をもった神の神自身への愛、つまり万人と万物に共通の神の自己愛とは異なる愛であるからだ。「聖書」には、イエスの言葉として「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、誰も父のもとに行くことはできない」（『ヨハネによる福音書』第十四章第六節）と記されている。神という救済者への道は、ただ一筋、イエスが拓いた道だけであるということである。もちろんこの言葉にニーチェは同意しない。ニーチェによれば「万人に共通する善、万人に共通する悪」などは存在しないのである。⁽¹⁶⁾ニーチェは、ツァラトゥストラをして、その友人たちに「これからわたしはひとりで行く！あなたがたも今は立ち去るがいい、そしてお

のおのがひとりで行きなさい！ そのことをわたしは望む。……今、わたしはあなたがたに命令する。わたしを捨て、あなたがた自身を見いだせ、と」⁽¹⁷⁾と語らせていたが、これは、ツァラトゥストラ自身がそうであるのと同様に、彼の思想に共感する者らが一人ひとり単独者として、自己自身への愛の導きによって、その者に固有の道を、自己自身に至るまで、また自己自身の救済に至るまで歩み続けることを希望するからである。しかし、ニーチェによれば、イエスもまた、自己自身への愛に導かれ、自己自身への道を歩み切った人物であり、むしろその点においては、単独者が自己自身への愛に導かれ、自己自身へと歩む道は、イエス個人が歩んだ道と似通っていると言える。超人への道はイエスの歩んだ道と似通っているとも言えるのである。また、ニーチェ自身、他でもないまさに『アンチクリスト』において「わたしはキリスト教のほんとうの歴史を物語ることにしよう。——すでに『キリスト教』と言う言葉が、一つの誤解である。——詰まるところは、キリスト教徒はただひとりしかいなかった。そしてその人は十字架につけられて死んだのだ」⁽¹⁹⁾と記している。このようなイエスを、ニーチェは、自己自身への愛に導かれ、自己自身に至る道を歩み切った者として「世界でもっとも高貴な人間（キリスト）」⁽²⁰⁾であつたと評価するのである。つまり、一人ひとりが、イエスの生活をキリスト教徒として真似るのではなく、他の誰の生活をも真似ることなく自己に固有の道を歩んだイエスのように、おのおのがおのの自己自身への道を歩むことを希望しているからである。ニーチェが、このような意味において、イエス

を「世界でもっとも高貴な人間（キリスト）」と捉えるこの点は、ニーチェと「聖書」の思想がもっとも近接する一点を示している。

三 第二の考察…愛の贈り物と感謝

ニーチェの著作『ツァラトゥストラはこう言つた』の中に次の言葉がある。

高貴な魂たちの流儀はこうである。すなわち彼らは、何者をも無償で手に入れようとはしない。ことに生を無償で手に入れたようとはしない。——

賤民の出の者は、無償で生きようとする。しかし、われわれそうでない者は、このわれわれには生が自分自身を贈り物として身を委ねてきたのだが、——われわれは、これに報いるには何、差し出すのが最善であるかを、いつも思索する！⁽²²⁾

（「古い石の板と新しい石の板」五）

ここでニーチェは、生ないし人生の捉え方に関し、「高貴な魂たち」と「賤民の出の者」を対称的な捉え方をする者として記述している。ニーチェがこの著作で言う「高貴な魂たち」とは、神は死んだと宣言する者⁽²³⁾であり、したがってみずからの生全体を創造者なる神からの贈り物と考えることはなく、神に感謝し神にその身をささげようともしない。しかし彼は、自己自身の存在、人生を贈り物とみなし

その贈り物に最善の仕方では報いたいと願ひ、その贈り主に感謝することの価値と意味の重大性を認識しているという点において自己自身の人生の全体的な価値と意味への問いに応えようとする者である。これに対し、「賤民の出の者」とは、無神論者である場合は無論のこと、たとえ本人がニーチェの生活した時代の最大公約数的な精神である常識に従つて「聖書」の教えに従うキリスト教徒であると自称しているとしても、自己自身の存在の贈り主であるはずの創造者なる神への献身を果たすことなく、人生（という贈り物）を無償で手に入れようとし、無償で手に入れようとするかぎりはその用い方も自分次第と考える者である。

おそらく『ツァラトゥストラはこう言つた』⁽²⁴⁾のものが、絶えず「聖書」の章句を念頭に置いて著された著作であり、その著作全体を通して「聖書」の章句への言及が頻繁に認められるのであるが、それゆえ、本節の冒頭に引用したニーチェの言葉から「聖書」の次のような章句を想起する読者も少なくないにちがいない。

渇きを覚えてゐる者は皆、水のところに來るがよい。銀をもたない者も來るがよい。穀物を求めて、食べよ。來て、銀を払ふことなく穀物を求め、価を払ふことなく、ぶどう酒と乳を得よ。
 （『イザヤ書』第五十五章第一節）

わたしはアルファであり、オメガである。初めてあり、終わりである。渇いている者には、命の水の泉から価なしに飲ませ

よう。

（『ヨハネの黙示録』第二十一章第六節）

命の水が欲しい者は、価なくして飲むがよい。

（『ヨハネの黙示録』第二十二章第十七節）

ニーチェ自身、ここに三箇所引用した「聖書」の章句に込められた思想を念頭において冒頭の言葉を記したと思われる。人間の生のみならず、一括して世界と称される万物の創造者、アルファにしてオメガである創造者なる神をその思想体系の中心に据えた「聖書」は、人間の生、命、存在もまた、根本的には神からの贈り物として捉えている。自分自身の生、命、存在を神からの贈り物として受け取り享受する者であるなら、彼はその贈り主の存在を認め、さらにそれにとどまらずその贈り主に対し最善の仕方では報いたいと考えることであろう。しかし、無償で生きようとする者、「賤民の出の者」は、自分自身の存在の贈り主に報いたいと願うことはないし、そもそも贈り主なる存在を意識することもないのかもしれない。

しかし、それはそれとして「聖書」そのものは、人間を、その存在の贈り主である神に対する責務を負った者として捉えている。例えば『申命記』に、次のように記されている。

あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。
 （『申命記』第六章第五節）

また、コリントの信徒に宛てたパウロの手紙には、次のように記されている。

あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。

(『コリントの信徒への手紙一』第十章第三十一節)

果たされるべき責務として、『申命記』では、端的に言えば神への徹底的な献身が記されており、『コリントの信徒への手紙一』では、その神への献身が、「食べる」、「飲む」という日常生活のめつとも基本的な層にまでおよぶべきであり、生活のいたるところで神への献身が実践されるべきであると述べられている。「あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです」(『コリントの信徒への手紙一』第六章第十九節)という章句と、意味するところは同じである。『コリントの信徒への手紙一』をしたためたパウロは、『コリントの信徒への手紙二』においても「わたしたちは生ける神の神殿なのです」(『コリントの信徒への手紙二』第六章第十六節)と記しているが、「神殿」とはすなわち、そこにおいて神の栄光がたたえられ神が現され賛美される場所ということであり、パウロは、人間の存在の意味と目的は、自己自身(自己自身の体)をそうした「神殿」として用いることにあると語っているのである。

それにしても、「賤民の出の者」がキリスト教を信じると自称する

者であるなら、彼にとって、『申命記』や『コリントの信徒への手紙一』に記された章句、神への献身を命ずる「聖書」の章句はどのように解されるのであろうか? 「価を払うことなく」(「価なしに」、「価なくして」)手に入れられる命ならば自分勝手に用いることも容認されていると考え、自分の命をもって、また自分の生において神の栄光を現そうが現すまいがそれは自分の好み次第でも考えるのであろうか? あるいは、キリスト教を奉じると自称する者でありながら、彼は、「聖書」の記述に不都合を感じ、「聖書」は全体的に見て必ずしも無矛盾ではない、端的に言えば「聖書」には矛盾があると判断するのではないだろうか? たしかに、一方では、「価なくして」命の水を飲むようにと語りかけ、他方ではその命の贈り主への献身を命じるのは矛盾である、と言えなくはない。しかしまた、献身とは最高の感謝の表現であり、自己存在そのものが「価なくして」享けたものであるからこそ、その存在のすべてを賭けてその存在の贈り主に対し感謝すること、つまり存在の贈り主に対し献身することが何の違和感も抵抗もなくなさるということもまた真実なのである。

『申命記』および『コリントの信徒への手紙一』や『コリントの信徒への手紙二』から引用した「聖書」の章句を読むと、ニーチェが「賤民の出の者」と呼ぶ者がたとえ自分自身では「聖書」の教えに従おうとするキリスト教徒であると自称しているにしても、むしろ彼らよりも、「われわれそうでない者」、あるいは「高貴な魂たち」の方が、「聖書」の教えに近接した地点において生活しようとする者

ではないかと思えてくる。たしかに、ニーチェがこの著作で言う「高貴な魂たち」とは、神は死んだと宣言する者であり、創造者なる神への献身を行なう者ではないが、彼は自分の存在、人生を贈り物とみなしその贈り物に報いることの重大性を理解しているという意味において人生全体の価値と意味への問いを真剣に受け止めようとしているからである。もちろん彼は、大地を超えた創造主である神の存在は容認しないし、大地を超えた存在に希望をおくこともない。

それゆえ、人生全体の価値と意味への問いをめぐる彼の探究は大地を超えた存在としての神に向かつてはばたくことはなく、大地への愛、大地への感謝へと向かつていくのであるが、しかし、何者かへの感謝の念をもってその何者かに報いたいと願うその志向は、人生全体の目的、人生全体の価値と意味への探究を伴うことなしにはありえないからである。ニーチェ自身は創造者なる神を認めない者、神を無みする者であるが、本節冒頭に引用した箇所では、彼自身「高貴な魂たち」の一人として、人生を「贈り物」と捉え、その贈り主に何をもって報いるべきか、贈り主に対してどのようにして感謝を示せばいいのか熟考する者であると表明していた。

ニーチェが超人にふさわしい徳と考へ記述する「贈り与える徳」の行為にはこうした献身の行為との類似が認められる。「贈り与える徳」をもつ者の渴望について、ニーチェは次のように語っている。

あなたがたの渴望は、みずから犠牲となり、贈り物になるということだ。だからこそ、あなたがたはすべての富を、おのれ

の魂のなかに積み重ねようという渴望をもつのだ。

飽くことなくあなたがたの魂は宝や宝玉を得ようと努める。それはあなたがたの徳が、贈り与えようとする意欲において飽くことを知らないからだ。

あなたがたはあらゆるものを自分のほうへ、自分のなかへと、強引に取り込む。それはそれらのものが、あなたがたの泉からふたたびあなたがたの愛の贈り物として溢れ出るようにと願うことなのだ。

まことに、こうした贈り与える愛は一切の価値の強奪者にならなければならない。しかしわたしは、この我欲を健全にして神聖と呼ぶ。⁽²⁷⁾
(「贈り与える徳」一)

つまり、「贈り与える徳」に生きる者はすべてを与えるためにすべてを獲得しようとする者、あるいはみずから犠牲となり贈り物となることにおいて自己自身を獲得しようとする者、「一切の価値の強奪者」である。多種多様で相対的な一切の駆け引きとは異なる次元でなされるこうした究極的な生全体の在り方を構成する基本的な二側面として、すべてを贈り与える行為とすべてを獲得しようとする行為があるが、前者の行為はみずからを犠牲としてささげる献身の行為と等しいと言えるだろう。この意味において、「贈り与える徳」を実践する者は、献身という徳を実践する者であるとも言える。他方、例えば人生といった価値あるものでさえも、それをいったん受け入れてしまうと、それを自己自身のうちに取り込んだまま決して

手放そうとしない者、「何もかもわたしのため」⁽²⁸⁾と言う者は、献身や感謝の行為をよくなしえない。こうした我欲のことを、ニーチェは「あまりに貧しい、飢えた、いつも盗もうとする我欲」、「病者の我欲、病める我欲」と呼び、右の引用部にある「健全にして神聖」な我欲に對置している。

要するに、「贈り与える徳」の中には、何者かからほどほどの愛とその愛にもとづく贈り物を受け取った者がその贈り主に感謝するという場合の感謝とは別種の、自分の人生の全体、自己存在そのものを愛の贈り物として受け取りそのことを意識した者が、その贈り主に示そうとする感謝や献身と類似の徳が認められるのである。「聖書」に記された献身の徳と類似したこうした徳を、ニーチェは、「贈り与える徳」の一側面として位置づけ、超人が実践する徳に包含させる見地に立つて、みずからの生全体を賭けて死に至るまで人間への同情を生きたイエスその人への深い共感をもって、また同時代のキリスト教徒たちの浅薄な同情への批判を込めて、彼らキリスト教徒に「あなたがた」と呼びかけ、語るのである。

あなたがたがこう言う時である。「わたしの同情が何だというのだろう！ 同情とは、人間を愛する者が磔にされる十字架ではないのか？ だがわたしの同情は、決してわたしを十字架⁽³⁰⁾にかけない！」
(「ツァラトゥストラの序説」三)

この箇所もまた、ニーチェが「聖書」の思想ときわめて近接する

一点である。

四 ニーチェと「聖書」の間

ニーチェの思想と「聖書」の思想の間には、根本的なレベルにおいて、どのような差があるのだろうか。このような問いをあらためて問うのは、両者が、まさにそれぞれの本質的な部分において、互いにまったく相容れず敵対し合っているように見える時があるかと思えば、両者がきわめて近接するように見える時もあるからである。ニーチェがその思想を展開する際、「聖書」との関係は、ある局面では敵対、別の局面では近接と、微妙に変化する。敵対の例を挙げると、神は死んだというニーチェの宣言がある。この宣言がある限り、両者の思想は容易には結合されえないし、宥和されえない。しかし、そのことを認定した上でなお、われわれは、ニーチェが「聖書」の思想に著しく近接する局面に気づくことがある。両者がそれぞれの思想の本質的な部分においてもっとも近接する点として本稿が示したのは、両者いずれもが自己自身への愛に重大な意味を認めているということ、その自己自身への愛の実践が最終的には、献身、自己犠牲、あるいは感謝においてきままるという認識において両者が一致するということであった。イエスに対するニーチェの深い共感、敬意、高い評価も、ニーチェ自身がこうした著しい近接を十分に意識していたからである。しかしそうは言っても、もちろん、こうした点においてさえ、なおニーチェと「聖書」の間にはわずか

な距離、隙間が残されている。ニーチェは、「もつとも小さな裂け目こそ、最後に橋渡しできる裂け目だ」(「夜の歌」)という言葉を記している。これは、贈り与えることと受け取ることとの間に存する裂け目に関する考察を記す言葉であるが、本稿の考察を進めてきたわれわれにとって、その言葉は、ニーチェ自身、みずからの思想と「聖書」がイエスという人物の存在において最接近しながらも、依然としてその間に存在する埋めることの困難な隙間、裂け目を認めざるを得ないと自覚していたからの言葉であるかのように聞こえる。ニーチェはまた、「言葉とその響き」とは「永遠に一分離されているものの間に架かる虹、幻の橋」ではないだろうかという考察を記し、さらに次のように語っている。「もつとも似通っているものの中にあって、幻はもつとも美しい嘘をつく。というのは、もつとも小さな裂け目こそ、もつとも橋渡しがむづかしい裂け目だからだ」(「快癒に向かう者」二)。これらの言葉を、それらが記される文脈から独立させ、本稿の考察に引き寄せて解釈するなら、ニーチェの語るとおり、ニーチェと「聖書」、これら両者間の架橋もきわめて困難である。神と超人、あるいは神と「大地の意義」⁽³⁴⁾の架橋の試みは、神すなわち大地、大地すなわち神という両者の同一性を語る思想、この汎神論を語る「言葉とその響き」を両者の間に「幻の橋」として架けることから着手されるべきなのかもしれない。⁽³⁵⁾

注

- (1) Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe, Herausgegeben von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Walter de Gruyter and Co, Berlin [以下 Nietzsche Werke と略す] 1969, Sechste Abteilung, Dritter Band, Der Antichrist, S. 221 [846].
- (2) Nietzsche Werke 1969, Sechste Abteilung, Dritter Band, Der Antichrist, S. 223 [847]. なお、引用文中の「」内は本稿筆者による補足。
- (3) 「アンチクリスト」キリスト教呪詛 (Der Antichrist. Fluch auf das Christenthum.) のこと。注(一)および(二)に引用した書物の S. 162-252 に所収。
- (4) Nietzsche Werke 1970, Achte Abteilung, Zweiter Band, Nachgelassene Fragmente, Herbst 1887 bis März 1888, S. 236 [10(19)] (285).
- (5) 「聖書」からの引用ならびに「聖書」への参照は、共同訳聖書実行委員会、「聖書 新共同訳—旧約聖書統編つき」、日本聖書協会、一九八九年、による。なお、引用に際し、いくつか表記(漢字と仮名)をあらため、地の文との統一をはかった。なお、パウロによる隣人愛の掟の表現も参照せよ。「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」、そのほかどんな掟があっても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます」(「ローマの信徒への手紙」第十三章第九節)。本稿に引用した「聖書」の章句の一部に付された傍点はすべて本稿筆者による。
- (6) Nietzsche Werke 1968, Sechste Abteilung, Erster Band, Also sprach Zarathustra, Ein Buch für Alle und Keinen (1883-1886) [以下 Zarathustra と略す], S. 212. なお、すべし Zarathustra からの引用は末尾に、その引用箇所を含む章の題を示した。
- (7) Zarathustra, S. 73.
- (8) 「詩篇」第十九編第二節〜第五節も参照せよ。そこには、「天は神の栄光を物語り、大空は御手の業を示す。昼は昼に語り伝え、夜は夜に知識を送る。話すことも、語ることもなく、声は聞こえなくても、その響きは全地に、その言葉は世界の果てに向かう」と記されている。
- (9) 「マタイによる福音書」第二十二章第三十六節を参照せよ。

- (10) 例えは、Zarathustra, S. 211, S. 212, S. 321.
- (11) Zarathustra, S. 238.
- (12) Zarathustra, S. 97.
- (13) Zarathustra, S. 190.
- (14) Zarathustra, S. 239.
- (15) *ibid.*
- (16) *ibid.* なお、『ツァラトゥストラはこう言った』所収の「喜びの情熱と苦しみ」の章に、次のような言葉が記されている。参照せよ。
——「わが兄弟よ、あなたが一つの徳をもち、それがあなた自身の徳であるなら、あなたはそれを他の何人とも共有することはないだろう」(「喜びの情熱と苦しみ」の情熱」：Zarathustra, S. 38)。——さらに、「これがわたしの善だ。わたしはこれを愛する。わたしはこれがすっかり気に入っている。このようなものとしてのみ、わたしは善を欲する」(*ibid.*)という記述も参照せよ。
- (17) Zarathustra, S. 97.
- (18) Zarathustra, S. 96. に「次の言葉が記されている。『医者よ、あなた自身を助けなさい。そうすれば、あなたはあなたの病人をも助けることになる。自分自身を癒す者を、自分の目で見るのが、病人の最上の助けとなるようにすればいい』」(「贈り与える徳」二)。「この言葉は、十字架上のイエスを侮辱し嘲弄する次の言葉を想起させる。『他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば信じてやろう』」(『マタイによる福音書』第二十七章第四十二節)。なお、『ルカによる福音書』第四章第二十三章も参照せよ。
- (19) Nietzsche Werke 1969, Sechste Abteilung, Dritter Band, Der Antichrist, S. 209 【§ 39】.
- (20) Nietzsche Werke 1967, Vierte Abteilung, Zweiter Band, Menschliches, Allzumenschliches, Erster Band, S. 320 【§ 475】.
- (21) 山を下りたツァラトゥストラが、ともに歩む道連れの必要を自覚して語る言葉、「わたしは生きた道連れを必要とする。それは、自分自身に従おうとするがゆえに、わたしに従い—そしてわたしが向かうところ

- 従ってくる道連れだ」(「ツァラトゥストラの序説」九：Zarathustra, S. 19)を参照せよ。ニーチェによれば、ともに歩む道連れでさえも、おのおのが自己自身に従い、おのおのがおの固有の自己自身への道を歩む結果として、ともに歩む道連れになっているにすぎないのである。
- (22) Zarathustra, S. 246.
- (23) Zarathustra, S. 8. 「ツァラトゥストラはこう言った」では、この箇所初めて「神は死んだ」(「ツァラトゥストラの序説」二)と語られる。
- (24) 「ツァラトゥストラはこう言った」を執筆する際ニーチェの念頭にあったと思われる数多くの「聖書」の章句が、吉沢伝三郎訳『ツァラトゥストラ(上)(下)』(ちくま学芸文庫、ニーチェ全集9、10)の訳注に挙げられている。
- (25) Zarathustra, S. 9. ここに、「大地に忠実であれ。地上を超えた希望をあなたがたに説く者らのことを信じるな」(「ツァラトゥストラの序説」三)とある。
- (26) Zarathustra, S. 11. ここに、「わたしは愛するのは、みずから没落し、みずから犠牲となる理由を、すぐに星空の背後に求めることなく、いつか大地が超人のものとなるようにと、その身を大地にささげる者だ」(「ツァラトゥストラの序説」四)とある。
- (27) Zarathustra, S. 94.
- (28) *ibid.*
- (29) *ibid.*
- (30) Zarathustra, S. 10.
- (31) Zarathustra, S. 133.
- (32) Zarathustra, S. 268.
- (33) *ibid.*
- (34) Zarathustra, S. 8. ここに、「超人とは大地の意義なのだ」(「ツァラトゥストラの序説」三)と記されている。
- (35) ニーチェの説く自己自身への愛とは、人を超人、すなわち「大地の意義」へと導く愛である。それゆえ、ニーチェの説く自己自身への愛とは大地の意義を究めようとする愛であり、端的に言えば大地への愛である。

しかも同時に、その愛を生きる人間自身は大地より生じ、大地に所属するものである。大地を愛する人間の生は大地からの贈り物なのである。したがって、ニーチェの説く自己自身への愛とは、その本質において、大地の大地自身への愛であると言えることができる。ツァラトゥストラという個別の存在が生きる自己自身への愛もまた、大地の大地自身への愛に包括される愛であり、究極的には大地が大地自身を愛するその愛に他ならない。この愛は、大地をその全体性において統一する愛であるとともに、それにとどまらず、大地の全体性の統一自体を多元的なものとして設定する愛であり、こうして全体的存在としての大地自体に多様で豊かな意義を付与する愛である。ニーチェと「聖書」、これら両者の思想がもつとも接近した際、両者のおおのの間になお残る裂け目、隙間は、ニーチェが説く大地の概念と「聖書」に記された神の概念のいずれの一方も直ちにまた他方でもあるというロゴス、すなわち神の神自身への愛と大地の大地自身への愛の同一性を語るロゴスによってのみ埋められることであろう。

(本稿は、拙著『光の探究——イエス・プラトン・ニーチェ論稿——』(理想社。理想哲学選書、一九九四年)の第五章第六章の考察を引き継ぐとともに、そこでは主題化できなかった思考領域に踏み込み、一步考察を進めたものである。)